

新頌

北原白秋

青空文庫

海道東征

海道東征

第一章 高千穂

男聲（獨唱竝に合唱）

神坐^ましき、蒼空^{あをぞら}と共に高く、
み身坐^ましき、皇祖^{すめらみおや}。
邈^{はる}かなり我が中空^{なかぞら}、
窮^{きは}み無し皇產靈^{すめむすび}、

いざ仰げ世のことごと、
天なるや崇きみ生を。

國成りき、綿津見の潮と稚く、
凝り成しき、この國土。

邈かなり我が國生、
おぎろなし天の瓊鉾、

いざ聽けよそのこをろに、
大八洲騰るとよみを。

皇統や、天照らす神の御裔、

代々坐しき、日向すでに。

邈かなり我が高千穂、

かぎりなし千重の波折、

いざ祝げよ日の直射す

海山のい照る宮居を。

神坐しき、千五百秋瑞穂の國、

皇國ぞ豊葦原。

邈かなり我が肇國

窮み無し天つみ業、

いざ征たせ早や東へ、

光宅^{みちた}らせ王澤^{みうつくしび}を。

第二章 大和思慕

女聲（獨唱竝に合唱）

大和^{やまと}は國のまほろば、
たたなづく青垣^{あをがきやま}山。

東^{ひむがし}や國^{もなか}の中央、
とりよろふ青垣^{あをがきやま}山。

うるは 美しと誰ぞ隠る、
た 誰ぞ天降るその磐船。
あも いはふね

かな 愛しよ鹽土の老翁、
しほつち をぢ
きこえさせその大和を。
やまと

やまと 大和はも聴美し、
ききるは
くもるもはる
その雲居思遙けし。

うるは 美しの大和や、
やまと

うるは
美しの大和や。

第三章 御船出

男聲女聲（獨唱竝に合唱）

その一

日はのぼる、旗雲の豊の茜に、
いざ御船出でませや、うまし美々津を。

海風ぎぬ、陽炎の東に立つと、

いざ行かせ、照り美しその海道。

海風ぎぬ、朝ぼらけ潮もかなひぬ、
ともへつ 艀舳接ぎ、
おほみふね 大御船、
みふなで 御船出今ぞ。

その二

あな清明け、
さや 神倭磐余彦、
かむやまといはれひこ 其の命や、
は あな映ゆし、
みこ もろもろの皇子たちや、
いろせ その皇兄や。

行でませや、おほらかに大御軍、
くら まだ蒙し、
はる 遙けきは鴻荒に屬へり。

みめぐみめみおや
慶を皇祖かく積みましき、
ただ
正しきを年のむた養ひましぬ。

かむがら
神柄や、幾萬、年経りましき、
みひかり
暉や、かつ重ね、代々坐しましぬ。

にぎたま
和み靈、また和せ、ただに安らと、
あらたま
荒み靈、まつろはぬいざことむけむ。

おほみいつて
大御稜威い照らすと御船出成りぬ、
みふなで

日の皇子^{みこ}や、御鉾^{みほこ}とり、かく起^たちましぬ。

その三

日はのぼる、旗雲の照^ありの茜^{あかね}を、
いざ御船、出でませや、明^{あか}き日^ひ向^{むか}を。

海風ぎぬ、満潮^{みちしほ}のゆたのたゆたに、
いざ行かせ、照^{くは}り美^うしその海^{みづち}道^ち。

海風ぎぬ、朝^あぼ^らけ潮^{しほ}もかなひぬ、
艦^{とも}舳^へ接^つぎ、大^{おほ}御^み船^{ふね}、御^み船^{ふな}出^な今^いぞ。

第四章 御船謠

男聲（獨唱竝に合唱）

その一

みふなで
御船出ぞ、大御船出、

みともぶねこそ
御伴船舉りさもらへ、

みとも
御伴びと舉り上げや。

ゆ
揺りとよめ科戸の風と

聲放て、東に向きて。

おほみふね まかぢしじ
大御船 眞棍繁ぬき、

照りわたる御弓の弭、
みゆみ ゆはず

あな清明け、神にします、
さや

あな眩ゆ、皇子にします。
まば みこ

はろばろや大海原、
おほうなばら

涯なしや青水沫、
はて あをみなわ

揺りとよめ大きな國民、
ゆ くにたみ

大君に、
おほぎみ

この神に、

たたごと
讃へ言、

よごと
壽詞申せや。

その二

荒海の、

荒海の潮の八百道の、
やほぢ

八潮道の、
やしほぢ

潮の八百會に、ハレヤ、
やほあひ

とどろ坐す速開津姫に、
ま はやあきつひめ

朝開、朝のみ霧の
あさびらき

遠白に、
とほじろ

末鎮み
すゑしづ

鎮まらせ、
しづ

み眼すがすがと笑^ゑませとぞ、

きこしめせと申さく

み船^{ふなうた}謠^た。

その三

い

ヤアハレ

海^{うなばら}原^{はら}や青海原。

ヤアハレ

青^{あをぐも}雲^{ぐも}やそのそぎ^{たち}立^{たち}、

その極^{きは}み、こをば。

我が海と大君^{おほきみの}宣らす、

我が空^{そら}と皇孫^{すめみまし}領らす。

ろ

ヤアハレ

潮^{しほなわ}漚^{なわ}のとどまるかぎり、

舟^{ふね}の舳^への行き行くきはみ。

ヤアハレ

島かけて、八十嶋^{やそしま}かけて、

おほうみ
大海に舟満ちつづけて。

見はるかし^{おほきみの}大君宣らす、
よも^{すめみまし}四方つ海皇孫領らす。

は

ヤアハレ
くに^{おほくに}つち
國土や、大國土。

ヤアハレ
國の壁^{かべ}そのそぎ立^{たち}、
その極み、こをば。

我が國と大君おほきみの宣らす、
我が土と皇孫すめみまし領らす。

に

ヤアハレ

青雲あをぐものそぎ立つきはみ、
白雲しろくもの向伏むかふすかぎり。

ヤアハレ

谷たにぐく蟻のさわたるきはみ、
馬の爪とどまるかぎり。

見はるかし、おほきみの大君宣らす、
よも四方つ國すめみまし皇孫領らす。
ほ

ヤ
狹さの國は廣くと、

ヤ
嶮けはし國たひ平らけくや。

ヤ
遠き國は綱つなうち掛け、
もそろよと、

もそろと、

國引くと、引き寄すと。

あなおほら、おほきみの大君宣らす、

あなをかし目翳まかげしおはす。

善えしや、善えしや、彌いやさか榮。

とどろとどろ、彌いやさか榮。

第五章 速吸と菟狹

その一

男聲獨唱

海原うなばらや青海原、
海道うみつちの導みちびきや、早さや槁根津日子ねつひこ、
速吸はやすひの水門みとになも、その珍彦うづひこ。

童聲或は女聲合唱（童ぶり）

龜しほの甲に揺られて、
潮しほの瀬に揺られて、

かぶりかうぶり海あまの子こ、

棹さをやらな、附ついまるれ、

波かぶりかぶるに、

み船へと移らせ、

名をのれ早や早や、

み船へまる出づるは

臣やつこぞとそれまをす。

國つ神と這はひこごむ。

潮みづく國つ神、

海豚いるかの眼まみ見よな、

遠眼とほめ、鋭眼とめ、慧さかしな、

羽^はぶり羽^はぶりおもしろ。

その二

男聲女聲（交互に唱和竝に合唱）

菟^う狹^さはよ、さ^しす潮^ほの水^み上^な、

豊^と國^{よく}の行^{かり}宮^{みや}。

あ^あはれ足^{あし}一^{ひとつ}騰^{あがり}宮^{のみや}とよ、
行^{かり}宮^{みや}。

足^{あし}一^{ひとつ}騰^{あがり}宮^{のみや}は、行^{かり}宮^{みや}と

青^{あお}の岩^{いわ}根^ねに一^{ひとつ}柱^{はしら}坐^ます。

足^{あし}一^{ひとつ} 騰^{あがり}宮^{のみや}に參^{まゐ}出ると、

大わたの龜や、川のぼり來^くる。

足^{あし}一^{ひとつ} 騰^{あがり}宮^{のみや}の大御饗^{おほみあへ}、

誰^たが獻^{たてまつ}る、はるか雲居に。

足^{あし}一^{ひとつ} 騰^{あがり}宮^{のみや}は菟狹津彦^{うさつひこ}、

朝^{あした}さもらふ、夕^{ゆふべ}さもらふ。

足^{あし}一^{ひとつ} 騰^{あがり}宮^{のみや}は湍^{たぎ}の上^へや、

足一つ騰^{あが}り、雲の邊^べに坐^ます。

ええしや、をしや、
ええしや、をしや。

第六章 海道回顧

その一

男聲女聲（交互に唱和竝に合唱）

かがなべて、日を夜^{よる}を、海^{うなばら}原渡り、

かなべて、將^はた歳を、宮遷^{うつ}らしき。

ああはれ、その幾^{いくとせ}歳、

ああはれ、その行き行き。

年ごとに、御伴^{みともぶね}船、いや數殖^{かずふ}えぬ、

つぎつぎに、御從^{みつぎ}びと、またいや増しぬ。

ああはれ、また春^{はるあき}秋、

ああはれ、そが海^{うみやま}山。

その二

月の端^はや、足^{あし}一^{ひとつ}騰^{あがり}宮^{のみや}、

ひととせ
一年や、筑紫の崗田の宮。

たけり
多祁理とも、阿岐の埃の宮、
ななとせ
たづたづや、七年や。あはれ。

きび
吉備にして、また八年、高嶋の宮、
やとせ
大和はも遠しとよ、高千穂よ遙けしと。

その三

うなばら
かがなべて、日を夜を、海原渡り、
はとし
かがなべて、將た歳を、宮遷らしき。

ああはれ、その幾^{いくとせ}歳、

ああはれ、その行き行き。

満ち満つや、み蓄^{たくはへ}、早^{あめ}やく成りぬ、
天^{あめ}の下^{した}ことむけむ、秋^{とき}今成りぬ。

ああはれ、えしや、

ああはれ、今^{とき}ぞ秋や。

第七章 白肩の津上陸

その一

男聲（獨唱竝に合唱）

あをぐも 青雲の白肩の津、その津に、
 を 雄たけびぞ今あがる、御船泊てぬ。

いざのぼれ大御軍、
 ますらを 丈夫の伴。

なみはや 浪速の邊に騒ぐ味、あぢがも
 へ 追ひ押しに押し、のぼり、み楯竝めぬ。
 たてな

いざのぼれ大御軍、
 おほみいくさ
 ますらを 丈夫の伴。

その二

くさかえ
日下江の蓼津、その津に、

雄たけびぞ今あがる、大御軍。
おほみいくさ

いざのぼれ、大和は近し、

いざ奮へ丈夫の伴。
ますらをとも

なみはや
浪速の潮なし遡ると、
うしほ さかのぼ

我が行かば何はばむ、長髓彦。
ながすねひこ

いざのぼれ、大和は近し、

いざ奮へ丈夫の伴。
ますらをとも

第八章 天業恢弘

男聲女聲（獨唱齊唱竝に合唱）

神坐^ましき、蒼雲^{あをぐも}の上^{うへ}に高く、

高千穂^{くじふる}や 觸^{たけ}峯^{たけ}。

邈^{はる}かなりその肇^{はつくに}國、

窮^{きは}みなし天^{あま}つみ業^{わざ}、

いざ仰^{おほみこと}げ大御言^{おほみこと}を、

畏^{かしこ}きや清^{さや}の御鏡^{みかがみ}。

國^{くに}ありき、綿津見の潮^{しほ}と稚^{わか}く、

光宅^{みちた}らし、四方^{よも}の中央^{もなか}。

邈^{はる}かなりその國^{くに}生^{うみ}、

かぎりなし天^{ひつぎ}つ日嗣^{ひつぎ}、

いざ繼^{ことよ}がせ言依^{ことよ}さすもの、

勾玉^{まがたま}とにほひ綴^{つづ}らせ。

道^{みち}ありき、古^{いにしへ}もかくぞ響^{ひび}きて、

つらぬくや、この天^{あめ}地^{つち}。

邈^{はる}かなりその神^{かむさが}性^が、

おぎろなしみ^{つるぎ}劍よ太刀、

いざ討たせまつろはぬもの、

ひたに討^うち、しかも和^{やは}せや。

雲蒼し、神^{かみ}さぶと彌^{いや}とこしへ、

照^{くは}り美し我が山^{やま}河^{かは}。

邈^{はる}かなりその國^{くに}柄^{がら}、

動^{ゆる}ぎなし底^いつ磐^{いは}根^ね、

いざ起^{すめらみこと}たせ天^{すめらみこと}皇^{すめらみこと}、

神^{かむやまといはれひこのみこと}倭^{かむやまといはれひこのみこと}磐^{かむやまといはれひこのみこと}余^{かむやまといはれひこのみこと}彦^{かむやまといはれひこのみこと}命^{かむやまといはれひこのみこと}。

神と坐す^ま大稜威^{おほみいつたかし}高領^{たかし}らせば、

八^{あめのしたひと}紘^{いへ}一つ宇とぞ。

邈^{はる}かなりその肇^{はつくに}國

涯^{はて}も無し天^{あま}つみ業^{わざ}、

いざ領^しらせ大和^{やまと}ここに、

雄たけびぞ、彌^{いやさか}榮を我等。

建速須佐之男命

建速須佐之男命

枯山の卷

第一段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、を喚び哭くおら

冥くらき神、

神性かむさがや、
霹靂はたたがみと

猛^{たけだけ}猛^{だけ}し、ひと柱、

しや、須^す佐^さ之^の男^を命^{のみこと}、

建^{たけ}須^す佐^さ之^の男^を、

速^{はや}須^す佐^さ之^の男^を、

ひたぶるや、益^{ます}良^{らが}神^みと

暴^{あら}ぶる荒^{あら}御^み魂^{たま}の^{おほ}大^わ童^{らは}

雄^お叫^けび、

泣^なきいさち、

韃^た踏^{たら}み、

蹴^くゑはららかすや、

纏^まき、放^{はな}つ湯^ゆ津^づ爪^{つま}櫛^{ぐし}、

美豆良みづら振り亂り、

拳たたき、

搔い垂らす、むなさき胸前や

振り分つ八握髭、やつかひげ

鳴りとよむ御統みすまるの御珠みたま、頸珠、

手纏たまきひぢまき、釧や、

ゆらかす足玉の緒もゆらに

揺り立て、

揺り荒すさべば、

凄まじ、この生はてみ終の神、

さながらや、海うみさか阪あがりの昂騰

押し移る

かんだちぐも
神立雲、

はやて
早手風、飛ぶ電光、

とどろ立つ蒼の虬、
あをみづち

閃めく掻爪の焦ちを、
かきづめ
いら
卷き崩れて
なだ

覆す鱗魚の大降り雨、
うろくづ

かく歎けば、

かく哭き喚べば、
な
おら

泣き腐し、泣き噪れば、
くた
はや

うち冥む世のことごと、
くら

降り腐すのことごと、
くた

海河も泣き涸らすと、

しとど垂る長霖雨や、ああ、

光無し、時無し雨、

日も無し、

夜はも無し、

ただ戀し、妣の國、

ただ遠し、根の堅洲國、

鬱にただ、鬱に泣き隠りぬ。

第二段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚びおらな哭く

冥くらき神、

おどろしき神かむさが性の、

ひたぶるの人性ひとさがの、

しゑや、縦よしや、善き惡しき、

ただ歎く暴風雨おほしけの神、

霧立つや八雲立つ

出雲の子ら、

大族おほうから、國造くにつこの祖先みおやがみ神、

しや、建速たけはや須佐すさの之男命をのみこと、

この命ぞ、

秀^ほに見る空のさきざき、

眼に見る國のまほろば、

たたなづく青垣山は

青山の石根^{いはね}、木の立、

神弱^{くた}り、泣き腐すと、

神さぶと、枯山と泣き枯らすと、

息^{おきな}長の息嘯^{おきそ}の風と

雨呼^なばひ、哭^{おら}き喚^なび、泣き隠^{こも}れば、

日を竝^なべて、夜^よを竝^なべて、かく歎けば、

鬱^{おほ}にただ鬱^{おほ}に冥^{くら}む。

かくなれば、世の神神、

をを、神神、

清明^{まさや}けき、ひとしほに和^{にぎ}御魂^{みたま}、

顯^{あき}らけく、美^いくしき、

常^{とこ}そよぎ、奇^しふる神、

山^{やま}と野^のの精^{いき}靈^{すたま}、

大山津見、

鹿^か屋^や野^ぬ比^ひ賣^め二柱の神、

そが持ち分けて生みませる神、

もろもろの生^むきの産^す巢^び、

大^お地^ほの草^{くさ}分^わ、木^きの神^{かみ}久^く久^く野^の智^ち神、

末^{すえ}ずゑの岐^われの神、

澄みわたる神境や、ひもろぎ

齋槻、湯津眞椿、ゆづき ゆづまつばき

葉廣熊白樹、はびろくまがし

嚴樞や、白檮や、いつかし しらかし 處女檀、をとめまゆみ

ああ、黒檜、くろび 雲懸るさるをがせ、かか

雪の上の白樺や、へ

水上の石楠の神、みなかみ

柊や、ひひらぎ ひらきそよご、

繁み立つ馬酔木、しみ あしび 黒木、

磐村の犬大羊齒、いはむら

沼邊には茅萱、ちがや 葦、髪がやつり。

もろもろの鏡葉や、

霞かすみばり針ほそ、織ほそき葉の神、

落葉木や、

若わかもえ萌もえの光る木の芽、

花ごも隠へごる杪。

そを何ぞ、泣き枯らすもの、

日に奪ひ、夜に奪ひ、雨ふらせば、

ありとある立たちのことごと、

ありとある色のことごと、

勢きほひ無こやし、臥たわり撓たわむと、

すべしなし、立ちも滅ぶと、

水の氣け盡き、素もと力ぢから盡き、

ああはや、匂失せぬ。

第三段

をを、をを、

をを。

神ぞ居をれ、喚おらび哭なく、

冥くらき神、

しや、童わらべ、速須佐之男はやすさのを、

大天おほあめや高天原、

日は治しらせ、大日靈貴おほひるめのむち、

さもこそや夜之食國よるのをすくに、

夜は治らせ、月よ月讀、

うなのはらあ
海原、吾はえ治らさじ、

ことよ
言依させ、吾は聽かじ、

かむがら
神柄ぞ、暴ぶる神、

きもぶとまなじり
膽太の毗裂くと、

言舉ぐと、泣きいさち、

あらが
抗ふと、おぞえ吼え立つ。

かく、吼え立てば、

あをうなばら
大海よ、滄海原、

ひずしぞ
引き引きに歪み退き、

潮干るや、干潟泡立ち、

沸き立つや、さそり蠍なすもの、

きくめ菊石なす、むなぎ鰻なすもの、

えら鰓の怪や、飛ぶ翼はねの龍たつ、

やつるぎ

八劍の蜥蜴草食み、

みおやどり

始祖鳥荒き齒に咋くふ。

あをみどろ

青水泥ひどらが沼、

わだかま

蟠るぬめりうはばみ蟒、

憚らず

あらぬおほうし曠野巨牛、

畏るなし

まが禍つ狼。

をを、をを、をを、

かく経れば、降りつつく雨をもちて、

蛆沸き、^{あざ}れ、^{さばへ}蒼蠅なす神神のおとなひ、

萬づ^{よも}四方つ神の災、

高津鳥の災、

昆^はふ蟲の災、

脂^{あぶら}なす、逆吐^{ゑづ}き、嘔吐^{たぐ}り、

生^{あや}み、殺^{あや}め、疼^{いた}き、呻^{によ}ぶ

もろもろの邪^{よこしま}、

曲^{まが}り、朽^くち、饅^すえ、死^しぬる物の穢^{けがれ}、

常^{とこ}無く、火^ひの氣^き無く、

耀かず、祓はらひ了へず、

下した心こころ澱み、

清すまず、障さやり、

噫はなひり、瘡おこり障さやり、

※ゑぐしく、焦いらだたしく、

苦しく、息づかしく、

瘡くさつみ病、搔たはき淫ると、

醜しこつ神、追ひ挑むと、

ことごとや世のことごと、

堰せきたぎち、

泣き、言問ひ、

舉り泣き、泣きなづみて、

ああはや事起りぬ。

第四段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、を喚びおら哭く、な

くら冥き神、

果しなし、泣きいさつと、

うなぎし海岸や上高岸、かみたかぎし

いはや巖窟なす岩戸、すなも沙面、

腹這ふ大海膽のおほひとで

べにがら
紅殻や、
なましにがら
生死殻、

さびくぎ
錆釘の
ここだくの釘

その根、
もとあら
幹疎にうち埋めて、

開き葉の高張りや、

大葉蘇鐵、

をを、
をを、

をを、

滴るや長雨しづき、
ながめ

みるめ
水松布なす美豆良雫き、
みづら

苔むすや、
ももただむき
股、
臂、

しただみ
細螺と珠い這ひ、
みたま

疊菰^{はかま}禪破れ裂け、

小鈴落ち、脚結紐^{あゆひ}解け、

はららぐと、その短裳^{みじかも}、

空見ず、ただ歎けば、

海見ず、ただ歎けば、

しや、伊邪那岐大神^{いざなぎのおほかみ}、

埒も無し、建速佐之男^{たけすさのを}、

汝^{みまし}、

言依^{ことよ}さす國は治^しらさず、

何もかも泣きいさちる。

父の御神詔^{みかみの}りたまへば、

伊邪那美よ、僕が母、

妣ははま坐せば、

根ねの堅洲國かたすくに、

僕は戀こほし、罷りゆかずば、

ただ哭なくと泣く。

ゑや、愚かや、

な住みそ、さば、此の國原、

行け、罷まかれ、

神柄かむがらぞ、もとな流浪さすらへ、

神やらひやらひたまふと、

ああはれ、建須佐之男たけすさのを、

眼も白^{しら}み、追ひやはれ、
泣き涸らし、はた、嗤^{わら}ひぬ。

大陸序曲

路傍にねむる

戦争畫報を見て

ひた疲れ、ああ、このごと

路の端^{はし}にねむる人、

命^{いのち}なり、赤き陽^ひに、

こんこんとうち伏しぬ。

正しきはまじろがず

あめ^{あめつち}つち^{おもて}に面ふらず、

天地に面ふらず、

戦士、守護神、
いくさひと まもりがみ
身をさらし、髭も凍る。
ひげ こごこ

なべて見よ、この姿、
晝も夜もここに無し、
よ
祖國のみ、民族の
血と肉と、一つのみ。

まつろはず、信なき
まこと
満蒙のかの匪賊。
憤る、憤るもの、

力なり、ためらはず。

戦へば勝つ人も

眠^ぬる間^ま無し、小床^{をどこ}無し、

せめて今、銃^つ又^くむと

ひきかぶるものも無し。

涙せよ、この姿、

晝^よも夜もここに無し。

ここにあり、土のうへ、

ひたぶるにねむる人。

狙ひ

しづかなり夏空、

軍の眞上、
まうへ

畏ろしく形無きもの
おそ

風をはらむつかのま。

敵なりや、
をさな
稚き

將^はた生^{いき}物^{もの}、

現れ、また現れ、

視野は透^{とほ}る。

響無し、聲も無し、

氣息のみ

輝やかし時秒のみ

満ち、いきるる

ひたおもて、黄^きの土^{つち}。

軍はあり、草をかつぎ

山のごとしづもる戦車、
晴^{せいがん}眼にひたと向ひ、
未^まだ放たず。

そのはじめ、天地^{あめつち}
創^{つく}られて新^{あらた}に、

俟^{いつ}つありき、何ごとかの
一の動き。

どとと射つ我か、彼か、
このたまゆら、

勝つ者の正しき狙ひ

神のみぞ知ろしめすらむ。

熟眠

陰^{かげ}はあり巨^{おほ}き戦車、

据われり休らひのあひだ、

道のべ、

響^{さば}なす蒼蠅^へのみ

集り^{たか}集^{たか}る。

ねぶたし、ただ

疲れはてて、

空も無し、仇も無し、

戦^{いくさ}、小止^{をや}み。

命なり、張り満つる

五日^{いつか}、六日^{むいか}、

夜^よも無し、朝も無し、

飲まず、食はず。

我射ちぬ、彼射ちぬ、

しかも大暑、

何ごとのしらすぞとも

知らず、射ちぬ。

強しとも弱しとも

誰か分^わかむ。

ねぶたし、ただに^{まぶた}瞼の

重く垂り來^く。

もぐりて、深くもぐりて、
兵なり、我ら、ねむる。

戦車よ、鐵の戦車、
しばしを、

ああ、しばしを光蔽へ。

ねぶたし、

ただに眠ると、

何も無し、我も無し、
ひた土に額^{ぬか}押しあて。

眞晝ぞ、ただ虚^{むな}しき。

饑^うゑたりや、饑うるともいざ、

生きむとも死なむとも

將た思はず。

ねぶたし、ただねぶくて

早や識^しらず戦^{いくさ}も、彈^{たま}丸も

ねぶたし、眠らしめて

つかのま母の聲聴かしめ。

突撃

突撃、

突撃するもの、

突くなり、突きまくり、

ひた刺し、刺しつらぬき、

銃床逆手さかてもろに

飛び入り、はたきのめし、

はたくや、たたき斃す、

これのみ、ただこれのみ。

突撃、

突撃するもの、

ひたぶる、ひたぶるなり、

生^{しやうし}死^{よこしま}無し、邪無し、

戦ひ、戦ひ^ほ惚れ、

突き刺し、たたき斃し、

聲のみ、息あるのみ、

我あり、跳ぶあるのみ。

突撃、

突撃する時、

ただ見る、命ある、醜き、

顔ゆがめ、まなこ眼ひらき、

恐れに、きも膽へし消え、

わななき、わななくもの。

敵なりや、彼なりや、

將た知らず、

斃れに、ただ斃れぬ。

響きて、ひと斃れぬ。

清明古調

白須賀

遠州濱名郡白須賀

白須賀は昔の宿、

ただ白し、ものさびて、

その蔀、しとみはひり戸、

なべてみな同じ障子。

ただわびし、軒竝のきなみの

同じ型、

出で、はひる人すらや、
同じ影。

音も無し、なにひとつ、
埃づくものも無し。

草屋のみ、

弱き日あたりたる。

いづこぞ遠江灘、

潮見坂ほどこかくて、

薄ら曇る低き空を

風も來ず。

冬ながら、その屯^{たむろ}。

ほのなごむ家がまへ、

ここ過ぎて、きびしとも、

おもほえず、寒しとも。

白須賀は舊街道、

朱の鶏冠^{とさか}ふりたてて

軍鶏^{しやも}の居れども。

そは暮のひとあかりのみ。

神苑

明治神宮西參道

幽^{かす}けさや、この日なかの

邃^{ふか}き木の木^こしづく。

開^きけよ、聲^{きこ}を雉^{ぎす}子、

外^との霞に。

たふとさや、神苑の

光る陽ひの櫃かしわかば若葉、
閑しづけさや、黝くろみた闌くる
こもごもの青と緑。

とどめじ、塵ひとつ、

玉の砂敷きならして、

すがすが
清々し、参道の

うねるこみち徑、こを行かばや。

芝生や、緩るきなだり、

寶物殿、

白きは隠る夏こもの

花のえご、香のひとつもと一本。

よく觀よ、和にぎみ靈たまに

吾が幼子をさなご、

龜の子の搖る影を、

鰭ひれ、さざなみ。

しづもれよ、晝間嵐ひるまあらし、

現うつながら、

ほのぼのと雲は立ち、

神と人息吹いぶきかよふ。

雪朝

清明さやけさや、この雪、
ふりおける雪につみ、
木々につみ、

燈籠にしろくつみぬ。

かみがき
神垣や、このあした、

いはぼし
石 走る水の音の

うちひびき、

つらら
氷柱みな新なり、日の光に。

この雪に跡つくる、

兎なり、跳び跳びて。

すがしきは笹の芽食むは

毛にこの柔をさなもの、幼し。

満ち満かたじけなつ忝ささ、

何事も^{かしこ}畏くて、

息づきぬ、

國の秀^ほの山高きに。

神ながら、この道に

ああ我や言ふすべなし、

大皇子^{おほみこ}の生れ^あまして

春まさに雲ぞ^{あが}騰る。

拍手^{かしはで}、

拍手^{かしはで}ぞ、ただ。

白樺

清^{すが}しきは雪に立つもの、

白樺の林よ、げに

しろき木肌、
こはだ

そは眞處女。
まをとめ

幽^{かす}けさよ、雪の溪^{たに}に

直立^{すぐた}ち、ほそき幹の
雪よりも光帯^びびて。

日は曇り、しろき眞晝、
聲も無し、このかがやき、
風も無し、色ひといろ。

閑^{しづ}けさよ、興安嶺、
ひえびえとけむる梢、
鷹すらも一羽飛ばす。

何すとか、ここに住む

白系露西亞、

貧しきは淨きよらかに窓ひらきて。

白はく夜やともほのあかる

空ひととき、

白樺の林よ、げに

光る神々。

煙霞餘情

丸彫

まるぼり
丸彫に我を彫る。

この眼の刃^{やいば}。

まるぼり
丸彫のこの木彫

細かくも、素^すに荒くも。

まるぼり
丸彫のこのもしさ

我彫らむ、みづからを皆。

丸彫まるぼりのてつつなさ、
觸れつつも、この己れ。

丸彫まるぼりよ、息つめて、
息かけて、いとほしと。

丸彫まるぼりのうるはしさ、
こを見よと思ふ。

まるぼり
丸彫に刻むもの、

我ならず、何かある。

まるぼり
丸彫に彫りあげて、

その白き手に獻げまし。

道の手

ふるさとや、わが母の

この山の手、

昔見しさながらを

ただしづかに。

闌^たけたり 櫨^は若^じ葉^{わかば}、

池も見えて、

壁赤き山の家^{いへ}の

ひとつふたつ。

築石や、棚畑や、

ふかき晝を

日の照り、

時うつる、この片^{かた}岨^そ。

影はあり、獨^た佇^たつ

よき童^{わらは}、

おもざし、我かとも、

いま見上げつ。

鸞^{うそどり}鳥よいづくにか

鳴き、くくみて、

色、匂、さまわかず、

風なるか、空なるかも。

北の關、^{せき}南の關、^{せき}

この道の手、

我は見る、我が昨日^{きのふ}の
をさなごころ。

こさめひたき

色はあり、聲にのみ、

こさめひたき、

雫のみこまかなる

この朝あけ。

花はあり、影にのみ、

ひとりしづか、

香にほひのみ寂びたもつ

杉よ檜。

巢かかは懸る、高くのみ、

ウメノキゴケ、
氣^け色^{しき}のみ、母^{おやど}鳥^りや
姿、羽^はぶり。

現^{うつ}あり、しろくのみ
濡るる光、

卵のみ、おそらくは
四^いつか五^つ。

色はあり、聲にのみ、
こさめひたき、

雫よ雫よと、
ただ幽かに。

臺南旅情

もの憂^うさや、老^{ラオチウ}酒や、
瓜^{クエチイ}子はとり食めども、
にほひなし、晝はまだ
彩燈の切子硝子。

空^{あだ}なりや、

雲に行く日のまぼろし、

ゆゑわかず、うつつなし、

女^{めわらべ}童は言問へども。

梅^{つゆ}雨ぐもり

影にのみ、朧たけて、

低くのみ

烏^{アアチウ}秋の飛びたわむと。

濡れがちや、

朱の寂びや、

そむね
反り棟の 礪瓦、

せきかんろう
赤嵌樓。

クエチイ
瓜子、瓜子は眼の下のちひ小さ黒子ほくろ

齒にあてつつ、

齒にあてつつ、

おろか
愚しく美しく時は過ぎぬ。

註。瓜子（西瓜のたね）烏秋（臺灣烏）

赤嵌樓（蘭人の所謂プロヒレンチヤ城なり）

鴛鴦

飛ぶ禽^{とり}としも、幽かだに
思ひかけずておろかさよ、
こずゑの雪に鴛鴦^{をしどり}の
たつる羽音^{はおと}を觀しや君。

白鷺

千鳥

雪のおもてに白鷺の
影ほの青き春の晝、
うつつ
現はそよぐ風さきに
たたず
イむもののせつなさよ。

月に觀し夜よの色ならで

氷は薄し水のうへ、

つかれば泛ぶ羽ながら

あまりにしろし我が千鳥。

紀元二千六百年頌

交聲曲詩篇

大陸の黎明

第一章 序曲

天地あめつちの闢ひらけしはじめ、成りませる神々
神々を、

(讃たたへまつれ、いざや。)

天照あまてらす大御神おほみかみ、皇祖すめらみおや、

すめらみおや
皇祖 かくぞ、

(讃^{たた}へまつれ、いざや。)

ことよ
言依さす中^{なか}つ國^{くに}、
大八洲^{おほやしま}この國土^{くにつち}、

(讃へまつれ、いざや。)

あめつち
天壤^{きは}と窮みなき、
天津日嗣^{あまつひつぎ}、ここに

(讃へまつれ、いざや。)

げに宇^{いへ}とおほひます
八^{あめのした}紘^{くが}、陸^{くが}を海を。

(讃へまつれ、いざや。)

大きなり、彌榮や、天つ御業、
げに崇^{たか}し、はや和^{やは}す大御軍。
おほみいくさ

(讃へまつれ、いざや。)

おお、今ぞ、大やまと、雲居騰^{あが}り、

おお、今ぞ、大^{おほ}き御代、照りわたらせ。

(讃へまつれ、いざや。)

(讃へまつれ、いざや。)

第二章

種子^{たね}ありき、神^{かみ}産^{むす}び玉と凝^こるもの、
かく在^ありき、在りて生き、香^かは蘊^{つつ}みぬ。

土なるや、大^{おほ}き陸^く蒙^{がモン}古^{ゴル}の底ひふかく、
隠^{こも}らひぬ、鑛^{あらがね}と巖^{はほ}との隙^{ひまうづ}埋^{うめ}もれ。

時ありき、日も知らず、星^{ほし}も別^わかず、
ただ在りき、かく在りて千五百万^{ちいほよろづ}の歳。

驚^{おどろ}けよ、この命^{いのち}、靈^{たま}びに若^{わか}し、

讃^ほめあげよ、かく古^ふりてかく全^{また}けし。

世々ありき、人は興り、地に満ち満ちき。

國興り、將^はた滅び、また代^よ々ありき。

つちふ
霾^きるや、黄^きなる沙^{すな}、嵐^{たけ}と哮^{たけ}び、
み^{みな}な^ぎぎ
漲^{おほ}るや、洪^{おほ}き水、天^{あめ}傾^{かた}ぶけぬ。

なほ在^ありき、生^めきの芽^{いの}の命^{のめ}薫^をすと、
俟^まつありき、つひに來^こむそが黎^{しの}明^{のめ}。

海を越え、空を蔽^{おほ}ひ、とどろ來るもの、
 地響^{ぢひびき}や、音爆^{おとは}ぜて翼搏^{つばさう}つもの。

誰ならず、日の御裔^{みすゑ}、久米大伴^{くめおほとも}が後^{のち}、
 神々の我が登音^{あのと}、大御軍^{おほみいくさ}。

俟^まつありき、大^くき陸^が、今かがやけり、
 さ緑や、はてしなくよみがへるもの。

種^{たね}子ありき、神^{かみ}産^{むす}び玉^{たま}と照^てるもの、
 命^{いのち}なり、息^{いき}づく^めと芽^めぶきそめぬ。

第三章

聞け大陸の黎明^{しのめ}に響くは何ぞ嚟^きと、
とどろと進む地響^{ぢひびき}の敢て押し行く勢^{いきほひ}を。

海を越えたる百萬の大御軍^{おほみいくさ}の雄叫びは
旗雲高くさしのぼる日にこそ勇めまのあたり。

沙漠の嵐吹き荒^{すさ}ぶ北は蒙古^{もんごる}、満洲^{まんちゅう}里亞^{りや}、
見よ、長城の嶮^{しづ}にして八達嶺は雲鎮^{しづ}む。

天より來る大黃河、長江の水さかしまに、
ひた攻めのぼる兵の勝鬨すでに年經りぬ。

神助の風に艦泊てて月落ちかかるバイヤス灣、
椰子の葉蔭に枕ぎて夢むは誰ぞ海南島。

ああ南の潮黒く、呼べば應へむ波の涯、
俟つある民の歡びに結びて誓ふ共榮圈。

思へ、とどろく聲音に大御軍の征くところ、

物ことごとくよみがへり、あかね茜きす日ぞ照り満みたむ。

第四章

大いなり、今にして現人神、あらひとがみかく坐おはせば、

かぎりなき大御稜威おほみいつかくあらせば。

(彌いやさか榮や、八あめのした紘一つ字いへと

彌榮や、アジャ大きな亞細亞、南の海。)

あらた新なり、早や目覺め、湧きあがるもの、

どよめきは天あめに満ち地つちに満ちぬ。

(彌榮や、この大朝とどろき。

彌榮や、この大朝とどろき。
)

あまぐも

天雲のあをくたなびく大朝くが陸

いにしへやは

かく古も和したまひき。

聲はあがる彌榮

紀元二千六百年壽詞

聲はあがる、彌榮、

とどろきはいやあがる、彌榮とぞ。

おほきみ
大君は神にし坐す、

おほみいつ
大御稜威神とし坐す。

あま ひつぎ
畏きや天つ日嗣、

幾^{いく}足^{たる}日^ひ、幾^{いく}千^ち歳^{とせ}しろしめす。

青雲や、肇^{はつくに}國や、大やまと、
 かむやまといはれひこのすめらみこと
 神倭磐余彦天皇。

かく宣^のらし、かく坐^ましき天^{すめらみこと}皇、
 あめのした^{いへ}
 八紘宇よげに、一つ宇^{いへ}と。

聲はあがる、彌^い榮^{やさか}、
 とどろきはいやあがる、彌^い榮^{やさか}とぞ。

あきつがみ
現神 今にし坐す、
おほみいつ
大御稜威日のごと坐す。

あか あま
ただ明し天つみ業、
くが
押し照るや大き陸、南の海。

こと
おほらかや、大み言かのごと坐す、
あめのした
八 紘げに宇と、一つ宇と。

ほ
祝ぎまつれ、大やまと。すめらみくに
皇國、
仰げいぎ、けふこの日、大み軍。

聲はあがる、
彌^い榮^{やさか}、
とどろきはいやあがる、

彌^い榮^{やさか}とぞ。

紀元二千六百年頌

朗誦詩

盛りあがる^も盛りあがる^も國民の意志と感動とを以て、盛りあがる
盛りあがる民族の血と肉とを以て、個の十の百の千の萬の億の底
力を以て、今だ今だ今こそは祝はう。紀元二千六百年、ああ遂に
この日が來たのだ。

蕩々^{たうたう}たる空、藹々^{あいあい}たる土、洋々たる海。和風おのづからに

して、麗光十方に布く。日の天にあるかくのごとく、民の仰いで
うるほ 霑ふかくのごとく、悠久二千六百年、祝典の今日が來たのだ。

ラヂオは傳へる式殿の森嚴を、目もあやなる幢幡、銀の銚
こ・しやくわう 射光の珠を。たま 嚙りうりやう 吮と鳴りわたる君が代の喇叭。きんべう 金屏
 の前に立たします。

せいてんし 聖天子、澄みに澄みとほる靈氣、聲ひとつせぬ五萬の呼吸、
すうかう 崇高なるこのひと時。靴音である。畏みに畏む總理大臣の靴音
 がする。奉る朗々たる壽詞。よごと 湧きあがる湧きあがる 天皇陛下萬
 歳。

皇禮砲はとゞろきわたつた。帝都は彩光に輝き、港灣は滿艦飾した。宮をあげての簫筆せうひちりき策、浦安うらやすの舞まひ。國をあげての日章旗、神輿みこし、群衆。祝祭は汜濫し、ああ熱情は爆發した。轟けと、轟けとばかりに叫ぶ大日本帝國萬歲。

光あれ、輝きあれ、大日本。神國日本の姿はここにある。仰げよ萬世一系の皇統、巍々ぎぎたる皇謨くわうぼは無限に坐ます。ああ、八紘かう一宇う、肇國てうこくの青雲は頭上せいうんにある。

かの正しきを養ひ、暉かがやきを重ね、慶めぐみを積む。皇祖皇宗はこの徳に

坐し、神ながら道に蒼古に、あやに畏き高千穂の聖火は今に燃え
 繼いで盡くるを知らぬ。(火だ、まさしく民族の祭典の火だ。)
 思へ、天業恢弘の黎明、鎮みに鎮む底つ岩根の上に宮
 柱太しき立てた檜原の高御座を、人皇第一代神倭磐余
 彦の天皇を、ああ、大和は國のまほろば、とりよろふ青
 垣、鵲は舞ひ、朗かにおほらかに草も木も言祝ぎ謳つた。

ああ、我が民族の清明心、正大、忠烈、武勇、風雅、廉潔の諸
 徳。精神は一貫する。傳統は山河と交響し、臣節は國土に根生ふ。
 大義の國日本、日本に光榮あれ。

相^{すがた}、^{ひら}展け。世紀は轉換する。躍進更に躍進する。興隆日本の正しい
この體制に信念あれ。

いにしへ、仇^{あだ}なすは討ちてしやみ、まつろはぬことむけ和^{やは}した。
砲煙のとどろき、爆彈の炸烈する、もとより聖業の完遂にある。
大皇軍^{おほみいくさ}の征^ゆくところ必ず宣撫^{めぐみ}の恩澤がある。げにや隈^{くま}なく御稜
威は光被する。鵬翼萬里、北を被^{おほ}ひ、大陸を裏^{つつ}み、南へ更に南へ
伸^のびる。曠古未曾有の東亞共榮圈、ああ、盟主日本。

盛^もりあがる盛^もりあがる國民の意志と感動とを以て、盛^もりあがる
盛^もりあがる民族の血と肉とを以て、今だ今だ今こそは三唱しよう。

聖壽の萬歳を、皇國の萬歳を。紀元二千六百年の今日、祝典は汜濫する。熱^{ねったう}鬧^{なう}は光と騰^{あが}る。進め一億、とどろく皇禮砲^{もと}の下より進め。大政翼贊の大行進を始め。行けよ皇國の盛^{せいだい}大^{だい}へ向つて、世界の新秩序へ向つて、人類の福祉^{ふくし}に萬邦の融和に向つて。一齊にとどろかす登^{あし}音^{おと}を以て、個の十の百の千の萬の億の、靜かな底力を以て。

後記

新頌

『新頌』は紀元二千六百年記念として最近に刊行された。創作年月は『海豹と雲』以後、今日に及んでゐる。

詩風は『海豹と雲』の延長であり、概ね蒼古調である。私は曾てかう思惟した。

「古代の膽を捉へることは、あながち古語死語を漁ることではない。生々躍動した古代感情のリズムをこそ素手に捉へることであ

る」と。

この所念よりして、この神ながらの道に立ち、かの蒼古に溯つて之を求めようとしたのである。而も現代の感覺を以て。

私はここに於て、これまでの全詩集を、この中の交聲曲詩篇

「海道東征」に總括し、我が大成を所期した。この「海道東征」

こそは、紀元二千六百年頌として日本文化中央聯盟の囑に應じて成した記念作であり、日本民族の物せる國民詩曲として、また信時潔氏の作曲と相俟つて、革正の先聲を掲げたものと信じ得る。

この交聲曲は東京音樂學校の演奏により五百人の合唱を以て公開せられ、ビクターに於てまた十二吋盤八枚にわたり吹き込まれた。さうして英獨の譯詩と共に、世界の樂匠たちにその寄するところ

になる祝典樂曲の返禮として海外へ贈られ、また放送せらるることになった。望外の幸である。因みにこの詩篇は神武天皇讚歌三部作の中の一つである。

「建速須佐之男命」の自由體長篇は、古事記を現代の感覺と角度とを以て新に解釋しようとした計畫の中の一試作であり、その一部である。私は同じくこの道を溯り、かの蒼雲を我が蒼雲と戴くであらう。

海豹と雲

初版

昭和四年八月

アルス版

(絶版)

白秋全集第四卷

詩集Ⅳ

昭和六年一月

アルス版

(絶版)

青空文庫情報

底本：「白秋詩歌集 第二卷」河出書房

1941（昭和16）年2月19日発行

※「後記」は「白秋詩歌集 第二卷」に対するものであるが「新頌」の見出しのつく部分のみを本文末に付記しました。

※「艚」と「艦」の混在は底本通りにしました。

入力：岡村和彦

校正：川山隆

2011年2月10日作成

2011年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新頌

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>